

「読解リテラシー」からみた読書活動

筑波大学准教授 甲斐雄一郎^{かひ ゆういちろう}

「社会に参加」するための読解リテラシー
誰もが耳にすることになった「PISA」では、読解リテラシーを「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発展させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力（※1）」と定義している。

読むことの学習指導において「社会に参加」するとはどういうことか。これまでは暗黙のうちに読書活動は「個人の営み」とされてきたために、こうした定義に私たちはあまりなじみがない。もちろん読書会や読書発表会など、読書活動を他者との共同作業の一部として位置つけた注目すべき実践はこれまでも存在した。しかし、読書活動を人々のつながりの中に位置づけ直して考えてみようとする実践を目にするようになったのは、「PISA」の定義と相前後した、ここ数年のことであるように思われる。

そしてそのような実践においては、
・目的やテーマに沿って本を選ぶこと
・必要などころを要約したり抜き出したりすること
・紹介の仕方を話し合うこと
などの、国語力のさまざまな展開が個人のものであるだけでなく、読書活動に「参加」する仲間のためにも意味をもつ場として考えら

れているのである。

単元「チェーン読書」について

その典型例として見なされるのが松林陽子氏による「チェーン読書」の実践である。この単元名について松林氏は次のように述べている。

「読書は個人的な営みであるが、自分が何を読もうか決めるときには他からの情報が大きな位置を占める場合がある。ある人の紹介した本が、他の人へと読みつなげられていく。また、一冊の本がテーマをもって他の本とながつていく。つまり本から本へ、人から人へと……チェーンのように、というのが単元名『チェーン読書』の由来である。（※2）」
単元は全七時間である。学習は個人で設定したテーマに沿った本のパンフレットづくりの呼びかけ、紹介する本・テーマの中間発表、テーマが共通する者同士でのグループづくり、パンフレットづくり、パンフレットによる情報交換、という流れである。情報交換とは図書室のテーブル一面に広げたパンフレットと、そこで紹介されている本とを読み合い、また、パンフレットの後ろに綴じ込んだ「書き込みのページ」に感想を書き合う活動である。松林氏はこの場面での活動を格別楽しんでいる生徒を見て、「読書はコミュニ

ケーション」と感じたと述べている。そして松林氏は「子ども学習記録」を用いつつ、この単元において行われた友達とのコミュニケーションの機会を通して、読書をめぐる個人の体験を広げるとともに、「友人関係そのものも今までは違う深みを伴っていくのではないか」と示唆している。

興味深いのは、指導者としてのこの実感が、アメリカにおける読書グループ（ブッククラブ）の調査を行ったエリザベス・ロングの観察と通い合うことである。すなわち彼女は、読書グループでの読書会を通して参加者一人ひとりが「新しい結びつき、新しい意味、そして新しい関係——本の登場人物への、あるいは著者への、彼女たち自身への、グループの他のメンバーへの、彼女たちが生きている社会と文化への——を創りだす過程にあるのを見ることができる（※3）」と指摘しているのである。

しかし、言うまでもないことだが、単元の計画と教師のあたたかなまなざしがあれば、それだけで子どもたちが「チェーン読書」に継続して参加できるわけではない。松林氏がこの単元実施の一年後に行ったアンケート調査のうち、本を読む契機についての集計結果は「今まで本をよく読んでいたA集団」と「日頃あまり読んでいなかったB集団」とにおいて、先生や親の薦めと友達の薦めによる

順序が逆転している。すなわちB集団は友達からの紹介が本を読むきっかけとなった比率が高いのに比べ、A集団の子どもたちにとって友達が紹介する本は「興味をもてるもの」がなかった、「気に入らない」などという声もあったという。

教師の新たな仕事

ロングが挙げている調査対象である読書グループからのメンバーの離脱の理由のうちの一つは、やはり「選書の質」の問題であった。

チェーン読書であれ読書会であれ、いくつもの制約にもかかわらずその範囲内での多様性は認められる必要があるだろう。しかしそれが「A集団」の子どもたちの一部のような素朴な忌避感を引き起こすことを念頭におくならば、学校教育におけるこうした活動はいくつかの条件の設定が必要になるだろう。今想定されるのは「ディスカッションの質の保証」と、「集団で課題を分け持たざるを得ないテーマの共有」である。

本をめぐるディスカッションの質やテーマは本それ自体が決定する側面を無視しえない。しかし、
・本についての言及の仕方を子どもたちが豊かに知っている場合

・子どもたちの生活経験や読書経験を教師が把握している場合

・探求すべきテーマが重要であることを子どもたちが自覚している場合

は、ディスカッションの展開および質の決定に関しての本それ自体の比重は小さくなるだろう。そしてこれらに着目した実践は少なくない。そこでこうした視点からそれらの実践を読み返すと同時に、毎日の国語の授業を構想してみることも、新たな時代の「読解リテラシー」を育てるための意味ある課題であると考えられる。

〈出典〉

- ※1 国立教育政策研究所編『生きるための知識と技能 OEC D生徒の学習到達度調査（PISA）2000年調査結果報告書』二〇〇二年（ぎょうせい）
- ※2 安居總子・東京都中学校青年国語研究会編著『読書生活者を育てる』二〇〇五年（東洋館出版社）
- ※3 エリザベス・ロング著 田口瑛子訳『ブッククラブ アメリカ女性と読書』二〇〇六年（京都大学図書情報学研究会）